

神さまがモーセに言われた言葉が 2 節以下に記されています。アブラハム、イサク、ヤコブの先祖たちには「全能の神」として現れた神さまが、今モーセに「主」という名前を示されました(2,3 節)。アブラハムに現れ、契約を立てられた全能の神が、エジプトで奴隷とされているイスラエルの人たちのうめき声を聞き、カナンの地を与えるという契約を実現するために彼らを贖うための行動を起されたのです。神さまは、厳しい奴隷労働を課されているイスラエルを「贖う」といわれます。「贖う」は、売ってしまった土地あるいは債務奴隷になってしまった人を同じ家族の一員が買い戻すことを意味する語です。この語を用いて、著者は、イスラエルの人たちがエジプトでの重労働に苦しめられている状況から、神さまが一方的に介入して彼らを救い出したことを表現しています。第二イザヤも「あなたたちを贖う方」「イスラエルを贖う万軍の主」と捕囚の地バビロンからの解放、故郷への帰還にこの動詞を使っています。そのことが、7節で、「わたしはあなたたちをわたしの民とし、わたしはあなたたちの神となる」と表現されています。そのような特別な関係を結ばれることが神さまとイスラエルの人たちとの契約です。その契約の具体的な現れとして、イスラエルの民は約束の地であるカナンへと導かれ、そこを与えられるのです。神さまがどんな約束と結びついているかが、主を主語とする動詞、「導き出す」「救い出す」「贖う」「ある、なる」で告げられています。そして、これらの動詞に「あなたたちを」「あなたたちの」が各々続けられ、それらの神さまの行為が誰に向けられているかが明らかにされています。

モーセは、神さまが先祖と結ばれた契約をいよいよ実現しようと行動を開始しておられることをイスラエルの人たちに告げたのですが、彼らはエジプトから課せられている厳しい重労働のために、モーセの言葉に耳を傾けようとしませんでした。ところが、人間が神さまに従順でないことが、かえって神さまの新しい行為をひき出すのです。イスラエルの人たちが神さまの約束を聞かなかったので、神さまはモーセを今度はファラオの元に遣わすことにし、その命令にモーセが異議を挟んだので、アロンを代弁者に立てる、というように展開していきます。モーセは、神さまの召しに相応しくないことを誰よりも知っていたので、与えられようとする職務を避けようとしたが、神さまはモーセを出エジプトの指導者とされました。

約束の地に入ったイスラエルの人たちは、6～7 節の神さまの言葉に答えて、自分たちの存在を感謝する信仰告白を行いました。これは申 26:5～9 に記されていますが、この言葉は収穫感謝祭などで朗唱されました。